

戊辰戦争桑名藩軍戦没者の墓

【桑名藩軍の寒河江着陣と戦の経過】

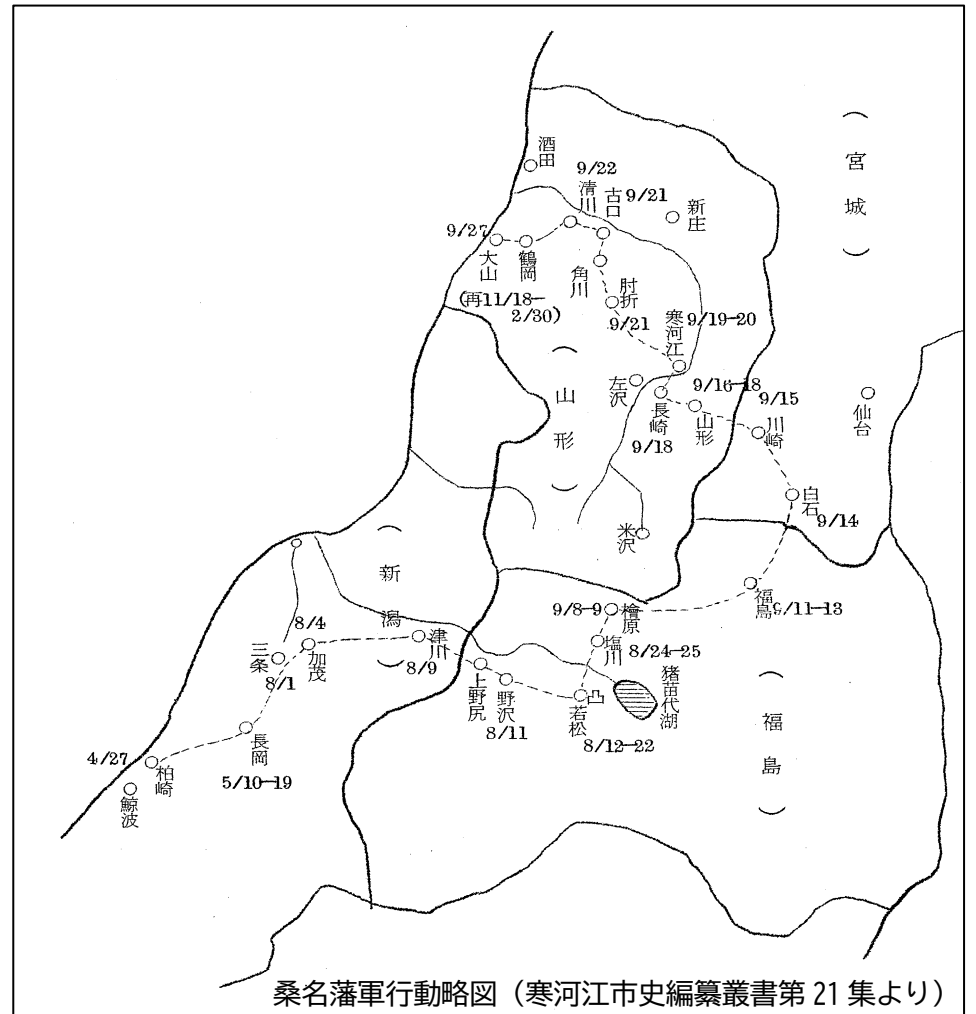
明治元年（1868）9月、北越戦争や会津若松での戦を経た桑名藩軍（桑名藩士を主体に唐津藩士等を含む）は13日に福島城下で庄内藩軍と合流し、一路庄内を目指すこととなった。

桑名・庄内連合軍は、白石、川崎を経て、16日には笹谷街道を通り夕刻に山形城下に到着。さらに18日には船町・長崎へ宿陣し、最上川を渡り19日夕刻寒河江に到着。この時、寒河江に着陣したのは、桑名藩の雷神隊（隊長：立見尚文(鑑三郎)）・致人隊（隊長：松浦秀八）のほか庄内藩の2小隊を合わせた約300名の兵士であった。その他の桑名藩神風隊（隊長：町田老之丞）と庄内2小隊は左沢・大井沢の守備に分かれた。

翌20日早朝、黒田清隆（了介）率いる薩摩藩軍と9月11日に降伏した米沢藩軍から成る新政府軍約2500名の大部隊が長崎方面から寒河江に進撃を開始。奇しくも最上川から市街地を覆った濃霧の中、不意をつかれた桑名藩軍は沼川沿いの新宿に布陣。市街地での激しい銃撃戦となり、徹底抗戦するが、十日市場、越井坂、細小路、下西小路、上町と後退を余儀なくされ、六供町を経て先に庄内藩軍が引き上げていた長岡山に布陣した。

霧が晴れた午前10時頃、長岡山での激しい銃撃戦が始まった。山上からの銃撃により一時は敵を追い落とした桑名・庄内藩軍も、北・東・南の三方から押し寄せる新政府軍の猛攻に耐え切れず、長岡山を西に降り、八鍬を経て白岩陣ヶ峯に布陣した。神風隊とも合流し、寒河江川を挟み約2時間銃撃戦を繰り広げたが、寒河江川を渡河し慈恩寺で戦闘を繰り広げた新政府軍が迫り退却した。夜通しで幸生・十部一峠を越え、さらに肘折・古口を経て、22日に庄内領清川に到着した。

※従来、当墓の指定名称は「桑名藩士埋葬地」としていたが、桑名藩各隊の指揮下には、転戦中に合流した唐津藩士や越後で徴兵した町兵・農兵がおり、共に埋葬されていることから令和5年12月4日に「戊辰戦争桑名藩軍戦没者の墓」に変更した。



桑名藩軍行動略図（寒河江市史編纂叢書第21集より）



「長岡山戊辰戦役古戦場」標石
（長岡山・厳島神社南側）

【戦没者の埋葬について】

寒河江の戦における戦死者は、桑名藩軍 19 名、庄内藩軍 4 名（うち 1 名は長崎渡舟場にて戦死）、新政府軍 10 名であった。遺体については、新政府方は間もなく収容されたが、庄内・桑名軍の遺体は両軍への関与を疑われることを恐れ、しばらくの間放置されていた。これを憂いた陽春院 19 世薩雲大観和尚は遺体を収容し、懇ろに回向して境内の地蔵尊裏に一括して入棺し厚く葬った。陽春院文書によると、この時埋葬した人数は、桑名藩士 19 名、他藩士 6 名の計 25 名とされる。

昭和 36 年（1961）に都市計画道路工事のため埋葬地移転を余儀なくされ、これらの遺骨を発掘したところ激戦を物語る遺骨が次々と確認された。遺骨は新潟大学人類学の小片博士により調査が行われ、四肢骨が少なくとも 20 体を数えることから桑名藩軍兵士の他にも一括して埋葬された者がいる可能性が高いことが分かった。明治 2 年（1869）の寒河江細小路契約講帳によれば、旧庄内藩士数名が陽春院を訪れ、埋葬された遺体の中から庄内藩士 3 名を掘り起こし庄内に移送した記事があり、桑名藩軍以外の遺体も埋葬されていることが分かっている。

【墓碑銘について】

向かって右側の墓碑には、桑名藩士戦死者として 18 名の名と、明治 8 年（1875）7 月に旧桑名藩主松平定敬外 24 名の旧藩士が建てた由が刻まれている。桑名藩士 18 名の供養のため、7 回忌にあたり建立されたものである。

左側の墓碑には、唐津藩士・白水良次郎の名と、明治 6 年（1873）建立で建立者名として「小笠原」姓だけが刻まれている。



戊辰戦争桑名藩軍戦没者の墓 全景
（写真中央：桑名藩士 18 名の墓、同左：白水良次郎の墓）

【桑名藩士 18 名墓】

建 立 年：明治 8 年

建 立 者：旧桑名藩主松平定敬 外旧藩士 24 名

埋葬者刻銘：谷三十郎、町田鎌五郎、河村政治、三谷右之右衛門、浅井金五郎、宇津野新兵エ、泉鉀之助、岡安栄之進、山脇仲右衛門、久松三郎、杉村安蔵、梅沢宗助、金子覚弥、長瀬金太、田中兼五郎、伊藤喜三郎、福地又五郎（越後加茂兵）、菊地伊助（以上 18 名、氏名表記は墓碑銘に準じた）

【唐津藩士 白水良次郎墓】

建 立 年：明治 6 年

建 立 者：小笠原（姓のみ刻銘）

桑名藩士の寒河江における討死状況（寒河江市史編纂叢書第 21 集より転載・一部表記修正）

番号	氏名年令	所属	致命傷	場所(介錯者)	戦没の状況等
1	谷 三十郎 (28 才)	軍事方 (御小姓 軍監勤)	腹抜	長岡山 (植地房蔵)	9 月 20 日寒河江にて討死、骸はそのまま。
2	町田鎌五郎 (20 才)	致人隊 (軍監助勤)	胸抜	長岡山 (松浦秀八)	同上
3	河村 正治 (33 才)	大砲隊 (軍監助勤)	胸抜		同上
4	三谷右之右ヱ門 (27 才)	大砲隊 (軍監助勤)	膝下抜		9 月 20 日寒河江引揚げの節、骸旁はり隊付引揚げ、其後行方知れず、討死か自殺と申すことに候。
5	浅井金五郎 (23 才)	大砲隊 (軍監助勤)	胸抜	寒河江 古河江	9 月 20 日寒河江にて討死、骸はそのまま。
6	宇津野新兵ヱ (36 才)	致人隊 (歩教導隊)	胸抜	寒河江 上町 大橋 (立見鑑三郎)	同上
7	泉 鉦之助 (18 才)	雷神隊 (歩教導隊)	足首抜	(歩兵忠作)	4 月 19 日宇都宮にて手負、9 月 20 日寒河江にて討死。歩兵忠作刀にて首揚げんとす。鉦之助云う。我が刀にて切り呉れるようにとて自ら刀を抜き渡す。忠作首揚ぐ。骸はそのまま。
8	岡安栄之進 (17 才)	致人隊 (十左ヱ門倅)	足首抜	(山本数馬)	9 月 20 日寒河江にて討死、骸はそのまま。
9	山脇仲右ヱ門 (24 才)	雷神隊 (大手馬廻り)	横腹抜	寒河江 新宿 (町田鎌五郎)	9 月 20 日寒河江にて討死。深手、自ら首揚げて呉れと声かけ、町田鎌五郎首を揚げる。然るに仲右ヱ門両手を揚げ候故、手首切れ前へ落つ。首揚げたけれども敵乱入に付、死骸はそのまま。
10	久松 三郎 (18 才)	雷神隊 (右馬丞弟)	肩抜	寒河江 新宿 (高木剛次郎)	5 月 13 日越後において長岡領朝日山手負、9 月 20 日寒河江討死、骸はそのまま。 註…高木剛次郎は高木貞作
11	杉村 安蔵 (18 才)	雷神隊 (御足輕)	肩抜		5 月 13 日越後長岡領朝日山手負。 9 月 20 日寒河江にて討死。
12	梅沢 宗助 (19 才)	致人隊 (歩教導隊)	胸抜		9 月 20 日寒河江にて討死、骸はそのまま。
13	金子 覚弥 (20 才)	致人隊 (歩教導隊)	討死	寒河江 新宿	9 月 20 日寒河江にて討死、骸はそのまま。
14	長瀬 金太 (20 才)	致人隊 (歩教導隊)	胸抜	寒河江 十日市場	御徒士出席、当分寄合番。9 月 20 日寒河江にて討死。骸はそのまま。
15	田中 兼五郎 (不詳)	雷神隊 (御足輕)	額抜	寒河江 新宿 (生沼久平)	9 月 20 日寒河江討死。
16	伊藤喜三郎 (18 才)	致人隊 (御足輕)	胸抜		同上
17	福地又五郎 (不詳)	致人隊 (越後加茂兵)	討死	寒河江 十日市場 (松浦秀八)	同上
18	菊地 伊助 (不詳)	雷神隊 (伝習兵)	額抜		同上
19	白水良次郎 (不詳)	雷神隊 (唐津藩主小笠原賢之助家中)	討死	(不破右門)	同上

【参考文献】

沖津常太郎・阿部酉喜夫 1967『寒河江市史編纂叢書第 21 集 寒河江における戊辰の戦跡』寒河江市史編纂委員会
郡 義武 1996『桑名藩戊辰戦記』新人物往来社
寒河江市史編さん委員会編 1999『寒河江市史 中巻 近世編』寒河江市
寒河江市史編さん委員会編 2007『寒河江市史 下巻 近代編』寒河江市
寒河江市史編纂委員会編 2021『寒河江市史 慈恩寺最上院日記 下』寒河江市